
大学初年次教育へのNIE活用に関する実験的演習の実践報告

—リメディアル教育への効果的な導入に向けて—

The practice report of the experimental exercise
about the NIE practical use to university first annual education
— the effective introduction to remedial education —

吉田 正高 | Masataka YOSHIDA

This report introduces concretely the NIE (Newspaper in Education) type lesson performed in Tohoku University of Art & Design in 2012, and aims at much more fullness of the remedial education in a future university.

Keywords: NIE (Newspaper in Education)

はじめに

本稿では、2012年度現在、大学という高等教育機関において初年次教育にNewspaper in Education (以下NIE)を活用した実践事例の詳細を報告し、さらにその意義や成果を提示することで、本演習が、大学入学後のリメディアル科目等へのスムーズな導入につながる可能性について、考察していきたい。

NIEとは、教育機関などで実践される新聞を活用した教育活動のことであり、1970年代後半のアメリカにおいて、新聞社と教育界との話し合いの中から、自然発生的に登場した¹。我が国では、若者たちの活字離れ、新聞離れの傾向に歯止めをかけようと、1988年に日本新聞協会を中心に活動が開始された²。その後、1990年代におけるメディアリテラシー教育の高まりを受ける形で、高校の教科に「情報」が加えられた1990年代後半、「NIE推進協議会」などによって、積極的に学校教育のなかで活用されるようになっていった³。

2007年、新学習指導要領の改定が中教審から提示された。そこには、①「生きる力」という理念の共有、②基礎的・基本的な知識・技能の習得、③思考力・判断力・表現力等の育成、④確かな学力を確立するために必要な授業時間数の確保、⑤学習意欲の向上や学習習慣の確立、⑥豊かな心や穏やかな体の育成のための指導の充実など、従来のいわゆる「ゆとり教育」からの転換を中心とした学習指導要領改善の方向性が明示されていた⁴。この答申を踏まえ、2008年3月28日に学校教育法施行規則が改正されて、小学校学習指導要領・中学校学習指導要領が公示され、2011年度より全面実施されている⁵。この学習指導要領改訂にともない、文部科学省より2012年度以降、中

学校で使用される教科書の検定結果も公表された⁶。

新学習指導要領およびその解説には、新聞を学校教育で活用していく点が強調されており、例えば中学校国語の教科書の多くに、「言語活動重視」の視点から、新聞の読み方（記事の比較、新聞作り、社説の読み比べなど）が掲載されていることも大きな特徴であろう⁷。

このような状況のもと、教育機関におけるNIEについて、とりわけ近年は、従来の小中学校～高校における実践に加えて、大学教育への導入に関しても、その効果が期待されるようになってきた。大学におけるNIEの活用事例について、例えば本学と同じ山形市内にある山形大学では、就職活動をサポートする目的で2009年より実施しているキャリア形成支援講座の一環として「NIE講座」を開講している。とはいえ、新聞記事を用いて討論を実施するというグループワークや集団面接などを念頭においた内容となっており、本稿で扱う大学初年次教育への導入とは目的を異にしている⁸。

以上の状況を踏まえ、本稿では、2012年度前期に東北芸術工科大学において実施した国語の基礎学力向上を目指したNIE導入型演習の具体例を報告することで、今後の大学初年次教育におけるリメディアル系科目の一層の充実に向けた参考事例とすることを目的としたい。

1. 本学における初年次教育の現状 —「教養ゼミナール」設置の意義を中心に—

東北芸術工科大学では、初年次教育の一貫として、1年前期の必修科目に「教養ゼミナール」を設定している。教養ゼミナールは、1年次前期に履修する必修の演習型授業として実施している。2010年度までは、学内における30名ほどの教員が、それぞれの専門を生かした多様な学習テーマを設定し、それぞれ10名前後の学生を対象にゼミナール形式で実施をしていたが、2011年度からは、「身体性、意欲、自主性、社会性」の4つの力を自らの内から喚起し、体得することを目的とする（シラバスより抜粋）という、身体知への気づきを目的としたグループ学習へと方針転換がはかられた。その結果、「土を耕し、生命を育てる」ことを通して、自然を五感で感じ、自分が生きていること、自分が自然の一部であり、他の生命とつながりあっている

ことを実感する。そうした生命自然の実感を基盤にしながら自己や芸術デザインについて考え、考えながら土を耕して自然と対話し、思考を深め、自己を確立していくことを目的とする。（シラバスより抜粋）「農芸クラス」と、「コミュニケーション力の向上。発想力の訓練。五感を働かせ、手を動かして身体感覚を取り戻し、身体に記憶させる。」「表現者としての基礎を身につけ、表現することの面白さを体験する。」「相互作用を通して多様な個を認識し、学びあうコミュニティを創造する。」（シラバスより抜粋）ことを目的とした「ワークショップクラス」に別れ、1クラスに30名前後が所属する複数クラスとして実施されている。

筆者が担当した「国語クラス」は、新入生の基礎的な国語力を上昇させるための実験的な試みとして、教養ゼミナールの中の1クラスとして設置されることになった。教養ゼミナールは、その性格上、2時限連続の演習科目として設定されており、また前述のとおり1年生前期の必修科目でもあることから、国語力が低いと判定された新入生を自然に誘導し、NIEを効果的に体験させるには格好の枠組みであった。

なぜ本学でNIEを実践する必要があったのか、具体的な実践報告に進む前に、その経緯を簡単に説明しておきたい。近年の本学学生の基礎学力の低下は、1年次、2年次を中心に対応する教養科目の担当教員のみならず、3年次、4年次において専門科目を担当する教員からも、たびたび話題としてあがっていた。そこで、実態を把握するために外部の国語力テストを受験させ、その結果を今後の教育活動に役立てることになった。

検定テストはZ会の「国語力検定テスト」が選択され、2012年4月7日に全新生668名のうち594名が参加し、実施された。

これまで本学では、英語（希望者は数学・理系も）に関して、入学時にプレースメントテストを実施してきたが、今年度は、国語力検定テストも合わせて実施することで、入学時点での学生の総合的な学力レベルの判断を試みた。国語力検定テストは、知識分野と理解分野の2分野で実施し、それぞれ「読む力」、「書く力」、「聞く力」、「話す力」、「国語総合力」の5つの能力別に振り分けた得点を総合し、さらにそのバランスなどを考慮しながら、最終的に特級（大学～社会人）、1級（高校2～3年生）、2級（中学3年生～高校1年生）、3級（中学1～2年生）、4級（中学新入生）、5級の6段階の獲得級を算出する方式であった⁹。

ここで提示した進め方について、その意図や意義を、具体的に述べてみたい。

本学が位置する山形県に関する郷土教育の一環となることを意識し、『山形新聞』の朝刊の中から、山形県内の記事を抽出する方式を採用した。本学では、開学当初より、地域社会との連携を一つの大きな目標と定めている。新入生の出身地の内訳をみると、山形県内から3割、山形以外の東北各県出身者が3割、その他地域の出身者が3割となっており、山形県出身の学生には、大学入学後に最初に経験する本演習で郷土の話題に触れることで、自らを育んだ原点である郷土意識を再確認し、また他県の出身学生には、これから4年間、生活・学習の基盤となる山形県に関する知識や興味を惹起することを目的とした。なお、本学には、地域社会との連携を模索する「共創デザイン室」が設置されており、さらに産学連携へも繋がる「チュートリアル」と呼ばれるボランティア主体の自主課外授業が数多く用意されている。本演習では、新入生が本学のこうした活動に興味を持ち、参加していく礎としての意義も持たせた。

ここで、本演習における専用紙A、Bの使用法と設計意図をのべておく。用紙Aおよび用紙Bの設計にあたっては、PISA(OECD生徒の学習到達度調査)の「読解力(Reading Literacy)」の定義である

- (1) 行為のプロセスとして、テキストの中の事実を切り取り、言語化・図式化する「情報の取り出し」
- (2) 書かれた情報から推論・比較して意味を理解する「テキストの解釈」
- (3) 書かれた情報を自らの知識や経験に位置づけて理解・評価(批判・仮定)する「熟考・評価」の3点を参考とした¹⁰。

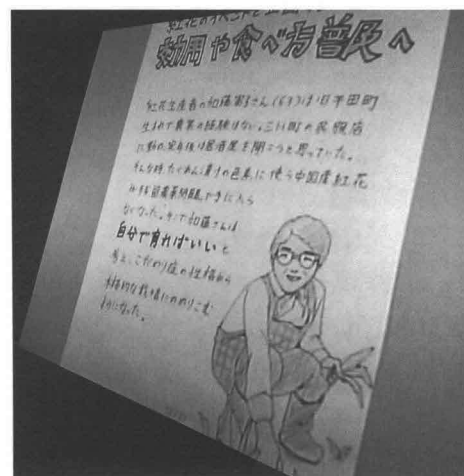
用紙A[図表1]は、罫線で仕切られた各行を1行おきに「◆」と「◇」などで区分するように指導した。「◆」行には、抽出する記事の基礎的な情報、つまり、その記事が、新聞紙面の「どの面」の「どの位置」に「何文字程度で執筆されているか」を正確に書き写させる。一方、「◇」の行は、前行で抽出した記事の内容を1行程度で簡潔にまとめるために使用する。これは、必要な情報を10数枚にわたる朝刊の紙面全体の中から見つけ出し、その記事のある紙面内の位置情報を確認し、記事全体の分量を素早く目算した上で、記載内容を把握し、簡潔にまとめるという作業を通じて、与えられた情報の中から必要な情報を取得した上で、その内容を「理解」し、「解釈」し、「熟考」し、正しくか

つ簡潔に自分の言葉で「表現」する、といった、文章読解に関わる基礎的な能力の向上を目指すことを意図したものである[写真1]。



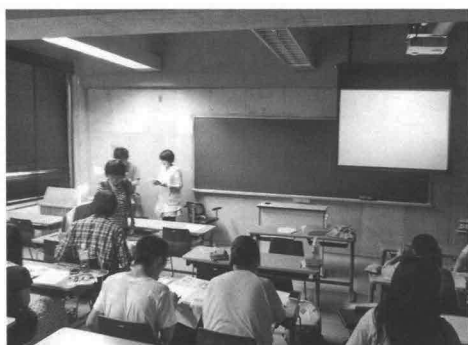
【写真1】 配付された山形新聞を用いて情報の抽出をする学生

一方、専用紙B[図表2]は、ほぼ白紙であり、自由記載を前提としている。ここには、専用紙Aで抽出した山形県内に関する記事のうち、自分が最も興味を惹かれた記事をひとつ選び、その記事を再度熟読した上で、演習の最後に各自が発表する原稿を作成するために使用する。本校は美術系大学であり、本演習が属する教養ゼミナールの趣旨にも鑑み、学生には、可能な限り「絵、イラスト」と「テキスト」によって画面を構成するように指導をした[写真2]。なお、記事選択の理由を必ず報告に盛り込ませたが、これは学生が自らの興味関心を自覚することを意図したためである。



【写真2】 専用紙Bを書画カメラでスクリーンに投影

毎回の演習最後に、専用紙Bを活用した個別報告を実施した[写真3]。これは、消極的であることが指摘されることの多い本学学生に、入学後のできるだけ早い機会に、人前で発言・発表をさせる機会を与えるという意義に加えて、他者に自分の意見や感想をできるだけわかりやすく伝達するにはどうすればよいのかを、それぞれの学生に考えさせることで、大学の講義や演習において「発言」をすることへの自覚を促すとともに、後に続く就職活動における面接や、社会人となって職業に従事する際の発話能力の涵養をも目指している。



[写真3] 書画カメラを用いた学生の報告風景

(2) 演習実践の具体的な報告

本演習に参加した1年生は22名であり、4月に実施した国語力検定における獲得級は、3級(中学2~3年相当)相当が1名、4級(中学1年相当)が8名、5級(中学生以下)が13名という構成であった。

演習の具体的な日程は、下記のとおりであった。

- 第1回 4月16日 「人生振り返りグラフ」作成
- 第2回 4月23日 「未来日記グラフ」作成
- 第3回 5月7日 NIEの指導および実践
- 第4回 5月14日 (同上)
- 第5回 5月21日 専用紙Aの作成作業
- 第6回 5月28日 専用紙Bの作成および報告
- 第7回 6月4日 (第5回に同じ)
- 第8回 6月11日 (第6回に同じ)
- 第9回 6月18日 NIE初回作業の振り返り

- 第10回 6月25日 他者が作成した専用紙Aの活用
- 第11回 7月2日 ペアによる作業と報告
- 第12回 7月9日 チームによる作業と報告
- 第13回 7月23日 学力検定テストの実施、
山形新聞社斎藤氏の特別講義
- 第14回 7月30日 山形新聞社見学
学力検定テスト結果返却

次に、全15回の授業の詳細を報告したい。

○第1回 4月16日

初回のガイダンスでは、他の教養ゼミナールのクラスと共通で、これまでの人生を振り返るグラフを大判の模造紙に描かせ、大学入学前までの自分の人生を振り返り、発表をさせた。これは、大学入学時点の「自分」の位置を、ライフプランの中で確認させることを目的とする。

○第2回 4月23日

初回の「人生振り返りグラフ」に続き、本クラスでは、自分の今後の人生設計を改めて考える「未来日記グラフ」を作成させた。入学当初という希望にあふれた時期に、自分は大学生活でどのような目的をもち、そのために何をしなければいけないか、を考えさせ、次週より開始するNIE学習へのモチベーションを維持させることを狙った。

なお、ここで、彼らに国語力検定テストの結果が芳しくなかった事実を伝え、次週より本クラスでは、NIE型の演習を独自に開始する旨を、初めて告知した。

○第3回 5月7日

まずは本授業で行うNIE演習の方法を指導する。基本的な時間配分としては、総時間160分のうち、最初の60分で専用紙Aを用いて新聞からの記事抽出と要約、次の60分で気になった記事の選択と発表原稿の作成、残りの40分で専用紙Bを用いて発表、という3区分を設定した。

[図表3]は、初回における学生の記事抽出・要約の1例であるが、主語のない文章や、本文内容が判断できない文章が多く、本演習に参加する学生たちの文章読解力や語彙、漢字知識など、基礎的国語力の低さが明白である。

さらに、[図表4]のように、1時間程度ですら集中して文章を読み、まとめることができない学習訓練の乏しさも露呈することになった。

この回は、本演習における学習方法の一連の流れを理解してもらうために、朝刊1日分のうち、専用紙Aへの記載は60分の時間内にとできるところまでで切り上げさせ、専用紙Bの作成から発表までを全ての受講学生に経験させた。

敬愛ゼミナール

WSクラス #20 担当教員: 吉田 正高

第4回 5月14日(月曜日 5-6時限)

山形新聞 2010年 5月 2日(日)

■山形県に関する記事の見出しを全て書き出し、記事内容を1行で要約
※何面の、どこに、どの程度の分量で、を必ず明記!

例: 1面/中右/360字/「山形スプリングフェスティバル」「働く車」バチャリ、ご満腹!
(要約) こどもの日になんだ企画「はたらく車大集合」では、体験授業に子どもたちが長蛇の列
4面/左/800字/日本の元皇、山形から ありゆきいしうち輝く富士
5面/左/350字/産道建設や食品加工工場が本格
6面/右/450字/川内川 新橋架設 食品加工工場が本格
7面/右/380字/食肉加工工場が本格
8面/右/300字/シャワーが本格
9面/右/250字/シャワーが本格
10面/右/200字/シャワーが本格
11面/右/150字/シャワーが本格
12面/右/100字/シャワーが本格
13面/右/50字/シャワーが本格
14面/右/50字/シャワーが本格
15面/右/50字/シャワーが本格
16面/右/50字/シャワーが本格
17面/右/50字/シャワーが本格
18面/右/50字/シャワーが本格
19面/右/50字/シャワーが本格
20面/右/50字/シャワーが本格

(1/2)

[図表3] 見出しの抽出が適当で内容要約の日本語もおかしい

○第4回 5月14日

前回同様、朝刊1日分のうち、専用紙A、専用紙Bの作成から発表までを全ての受講学生に経験させた。

○第5回 5月21日

第3回、第4回を経て、60分で朝刊1日分の中から必要情報を抽出することが難しいと判断し、この回は160分全てを使って、1日分の新聞紙面の中から山形に関する記事全てを抽出させることにした。成果は明白で、多くの学生が専用紙Aの裏面にいたるまで、20個以上の県内記事を抽出した。

学生は、じっくりと読み込めば、もっと多くの必要情報が発見できることを実感し、次回以降の記事抽出数の目標を正確に把握することができたと思われる[図表5]。

○第6回 5月28日

前回まとめた専用紙Aをもとに、専用紙Bを作成し、報告を実施した。時間に余裕を持たせたことで、各自が納得のいく発表原稿を作成できたようで、発表も工夫されていた。

なお、この日は専用紙Bのまとめ作業が中心で、若干の時間的な余裕があったため、全受講学生を対象に個別面接を実施した。ここまで4回分のNIE演習の成果を中心

敬愛ゼミナール

WSクラス #20 担当教員: 吉田 正高

第4回 5月14日(月曜日 5-6時限)

山形新聞 2010年 5月 22日(土)

■山形県に関する記事の見出しを全て書き出し、記事内容を1行で要約
※何面の、どこに、どの程度の分量で、を必ず明記!

例: 1面/中右/360字/「山形スプリングフェスティバル」「働く車」バチャリ、ご満腹!
(要約) こどもの日になんだ企画「はたらく車大集合」では、体験授業に子どもたちが長蛇の列
1面/上左/250字/「ツツク」が本格
2面/上右/450字/「ツツク」が本格
3面/上右/350字/「ツツク」が本格
4面/上右/250字/「ツツク」が本格
5面/上右/150字/「ツツク」が本格
6面/上右/50字/「ツツク」が本格
7面/上右/50字/「ツツク」が本格
8面/上右/50字/「ツツク」が本格
9面/上右/50字/「ツツク」が本格
10面/上右/50字/「ツツク」が本格
11面/上右/50字/「ツツク」が本格
12面/上右/50字/「ツツク」が本格
13面/上右/50字/「ツツク」が本格
14面/上右/50字/「ツツク」が本格
15面/上右/50字/「ツツク」が本格
16面/上右/50字/「ツツク」が本格
17面/上右/50字/「ツツク」が本格
18面/上右/50字/「ツツク」が本格
19面/上右/50字/「ツツク」が本格
20面/上右/50字/「ツツク」が本格

(1/2)

[図表4] 記事の文字数の把握および内容要約が不完全

敬愛ゼミナール

WSクラス #20 担当教員: 吉田 正高

第3回 5月7日(月曜日 5-6時限)

山形新聞 2010年 4月 9日(金)

■山形県に関する記事の見出しを全て書き出し、記事内容を1行で要約
※何面の、どこに、どの程度の分量で、を必ず明記!

例: 1面/中右/360字/「山形スプリングフェスティバル」「働く車」バチャリ、ご満腹!
(要約) こどもの日になんだ企画「はたらく車大集合」では、体験授業に子どもたちが長蛇の列
1面/上右/250字/「ツツク」が本格
2面/上右/450字/「ツツク」が本格
3面/上右/350字/「ツツク」が本格
4面/上右/250字/「ツツク」が本格
5面/上右/150字/「ツツク」が本格
6面/上右/50字/「ツツク」が本格
7面/上右/50字/「ツツク」が本格
8面/上右/50字/「ツツク」が本格
9面/上右/50字/「ツツク」が本格
10面/上右/50字/「ツツク」が本格
11面/上右/50字/「ツツク」が本格
12面/上右/50字/「ツツク」が本格
13面/上右/50字/「ツツク」が本格
14面/上右/50字/「ツツク」が本格
15面/上右/50字/「ツツク」が本格
16面/上右/50字/「ツツク」が本格
17面/上右/50字/「ツツク」が本格
18面/上右/50字/「ツツク」が本格
19面/上右/50字/「ツツク」が本格
20面/上右/50字/「ツツク」が本格

(1/2)

[図表5] 見出し抽出が丁寧で、記事要約の日本語表現も巧み

に、それぞれ不足している点や改善をはかるべき点を指摘し、本演習のより積極的な活用を自覚させた。

○第7回 6月4日

第5回と同様に、2時限分を使って詳細に情報を抽出させ、専用紙Aをまとめさせた。

○第8回 6月11日

第6回と同様に、2時限分を使って専用紙Bをまとめさせた。

○第9回 6月18日

この回は、他の学生がまとめた専用紙Aを配付し、新たに専用紙Bをまとめさせた。その際、前の学生が発表に使った記事は使わないこととした。また、専用紙Bの下部に「以前に抽出した学生がまとめた記事内容要約と発表内容についての感想・批評」を記述させた。

この回の意図は、他者の成果を活用させることで、本演習の意図を客観的に実感させ、加えて他者との比較によって、自分に欠けている点、優っている点、修正していくべき点などを確認させることであった。

他者のまとめた専用紙Aに関する学生のコメントをみると、「字がキレイだし読みやすい」「大きさもちょうどよくてうらやましいくらい」などの肯定的評価の一方、「2面からもおもしろい記事があるのにもったいない」「～で～が行われた、まで書いてない文がチラホラ」「もっと詳しい情報があってもよかった」など、内容要約に関する批判的コメントもあり、自らのまとめ方を他者と比較し、検討するという目的は達成できたと考えられる。

○第10回 6月25日

最初のNIE演習の回(5月7日)に実施した自らの作業のうち、専用紙Aを再配付し、それと新聞を再照合した上で、情報が足りない場合は新たに赤字で記事を追加し、また文字の修正などをし、その中から以前の発表で使用しなかった記事をひとつ選び、専用紙Bを作成し、発表させた。

この振り返り作業では、過去の自分と比較して、専用紙Aへの赤字の修正によって自己の文章読解力の向上を自覚させ、また、専用紙Bのまとめ方も巧みになっているという事実を実感させることを目的とした。学生のコメントからは「以前の物は文字数が少なくあまり解りやすい物ではな

かった」、「以前に書いたものは文字ばかりで見づらく、簡単にいうと、ただ新聞の抜き出しというような感じで工夫がなかった」など、自らの成長を確認している様子が伺えた。

○第11回 7月2日

ここまで学生には個人作業を中心に取り組みさせてきたが、今回はペアを組ませた作業を試みた。まず、学生をペアリングし、通常の演習では個人で作成している専用紙AおよびBの作成を、二人で手分けして行わせた。なお、ペアの組み合わせについては、相互に刺激を与えあうように、国語力検定の獲得級および所属学部・学科が同じにならないように注意した。

第9回で他者のまとめ方や注目記事について考えさせ、第10回で同じ新聞を再読することで新たな発見があることを実感させた上で、このような回を設けたことで、ペアでなければ成立しない発表の工夫[図表6]がみられた。



【図表6】用紙を2枚連続させた発表の工夫例

○第12回 7月9日

前回(第11回)に実施したペアでの作業を受けて、今回は3~4名のグループを組んでの作業を実施した。ひとつの目的に対して、チームで協力して成果を出すことを課したのは、前回の演習において自分の意見と他者の意見をすり合わせる作業を経ていると判断したためである。また、これまでの演習の中で、作業の目的が各自明確になっており、それを一つの柱としてコミュニケーション力を自覚してもらう意図があった。前回のペアワークに引き続き、今回のチーム分けについても、国語力検定の獲得級および所属学部・学科が同じにならないように注意した。作業内容について、あえて多くの指示をせず、学生の自主性にまかせることで話し合いの時間を多く作ることができる設定をしたが、結果的に興味深い記事の選択と報告が行われた。

記事の抽出では、複数で分担できることを生かした悉皆作業が行われ、これまでの回と比較してもより細かい情報を拾い出そうという姿勢がみられた。

また、チーム報告では、複数の専用紙Bを活用できる特性を生かし、テキスト、イラスト、グラフを分割する[図表7]、関連性のある記事を集合させて内容にふくらみを持たせる[図表8]など、より他者の興味関心を喚起しようとする姿勢が垣間見られた。

なお、演習の最後に、次週は国語力検定テストを実施する旨を伝達した。

山形が全国1位

何が? 社長輩出率

都道府県別の社長輩出率が山形県の総人口117万9千人のうち1万5千2百1人で全国1位!

伝統工芸品の宝庫」と称されるほど「家内工業」が盛ん!

順位	都道府県	出生率
1位	山形県	1.289
2位	香川県	1.219
3位	徳島県	1.190
4位	大分県	1.095
5位	秋田県	1.068
6位	山梨県	1.045
7位	愛媛県	1.015
8位	福井県	1.005
9位	高知県	0.991
10位	広島県	0.985

親子家庭問題の「本根が1位」になった理由

親の七光り ← 社長輩出率

明確な理由は難しい ← 本根が1位

MATOME

親子家庭問題の本根

山形が全国1位!? → 個人商店も入っているからでは?

意見まとめ

- 親の七光り
- 明確な理由は難しい
- 山形県と社長輩出率の何が!? (社長帰人?)
- 家内工業が盛ん → 伝統工芸品の宝庫
- 親族で事業継承 → 古い古い老舗企業

⇒ ひみとーかもしれない。

[図表7] 見出し、グラフ、まとめなどを分担

地元産の食肉が笑顔の郷土

山形県山形市

「地酒と黒ペッパー」

米沢牛と地酒を味わおう

この酒は、約450人の最高級米沢牛の肉料理と地元産の酒を堪能し、和重と地酒の組み合わせが約220万円

酒は地酒と地酒、水は地酒、4人1組の席は3000円以上

地元の食肉が笑顔の郷土

酒が飲める♪酒が飲める♪

酒が飲める♪酒が飲める♪

料理とワインに香鼓

第34回山形ワインまつりが、鶴岡市で開催。

約2千人が特産のワインや地元の味覚を堪能。

会場には、赤や白、ロゼの各ワインと山アドウジュース。料理では、地元産材を使った羊羹やイカの一夜干し、庄内産の焼肉ブーフカなど。

参加者は、料理を堪能しながら、グラスにワインやジュースを注ぎ、はしゃぎながら楽しんだ。

感想：男性が多い。記事を読んだら、飲み会を企画しようと思える。

MATOME

こちら南陽では酒場で

ワインの製造をしている

- 三浦ワイナリー
- 大森ワイナリー
- 佐藤ワイナリー
- 佐藤ワイナリー

ワイナリーが、赤、白、ロゼの3種類を製造している

三浦ワイナリーは、ピノノワールとメルローをメインに生産している

[図表8] 同じ新聞紙上の別記事を「酒」をテーマに統合

○第13回 7月23日

2限分の演習のうち、5時限目を国語力検定テストの再受検にあて、6時限目はNIEおよび山形新聞社に関する講義を実施した。

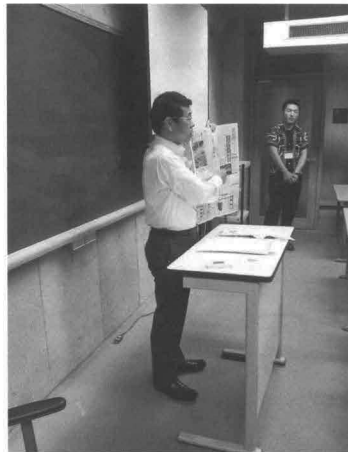
5時限目に実施した国語力検定テストについては、前回(4月7日実施)と同様にZ会によるテストを採用した[写真4]。このテストは、本演習を経験することで、学生たちの国語力がどの程度向上したのか、また基礎知識や読解力に影響があったのかを検証するという目的はもちろん、学生は再び同様の国語力検定テストを受検することで、改めて現在の自身の学力を認識し、1年後期からの学習目標や学習時間を決めるモチベーションの一つとなることも考慮した。

なお、検定テストの結果については、次章で詳しく述べたい。



[写真4] 7月23日の国語力検定テスト受検風景

6時限目に実施した講義では、山形新聞の現役の記者でもある報道部の斎藤敏広氏をゲスト講師としてお招きした[写真5]。ここでは、新聞報道の意義や新聞記者の使命、さらにどのように取材を行い、記事を執筆し、紙面にどのように反映させていくのか、見出しをどのように決定するかなど、実体験をもとにお話しいただいた。さらにNIEが国内、県内において現在どのように普及しているのか、その活用方法などをふくめて、ご解説いただいた。学生たちは、ここではじめて自分たちがこれまで実施してきた演習の目的や意義を包括的に実感するに至った。また、自らが10回以上にわたって演習の中で教材として扱ってきた新聞の現役記者と直接対話できる機会を得て、学生から活発な質問があった。



[写真5] 斎藤敏広氏(山形新聞)による特別講義

○ 第14回 7月30日

これまでNIEで活用してきた山形新聞の本社見学を行った。特に、山形新聞社のご好意により、新聞記事の執筆・校正や編集会議の現場を、青塚晃報道部長のご案内で見学をさせていただき、学生からの各制作部署での質問にも丁寧にご対応いただいた。

あわせて学生に4月分と7月分の国語力検定テストの成果と比較表を個別に手渡し、今後のさらなる国語力向上にむけた学習について、話し合った。

3. NIE型演習の成果

最後に、本演習が学生の国語力向上にどの程度の効果あげたか、具体的に検証していきたい。

(1) 国語力検定テストの比較

入学直後の2012年4月7日および本演習内における7月23日の2回にわたって実施した国語力検定テストの結果を比較していきたい。なお、概略については、右の成績対照一覧[表1]をご参照されたい。

まず、獲得級を比較する。今回のテストの獲得級が前回は上回った、つまりランクがアップした学生は22名中13名と全体のおよそ60%であった。そのうち、2ランクの大幅アップが見られた学生が6名もいたことは特筆される。2回目のテスト結果をふまえての22名の獲得級内訳は、2

【国語力検定】成績対照一覧表
 教養ゼミナール #20 吉田クラス
 ※検定実施日 前回=2012.4.7 今回=2012.7.23

獲得級		総合	知識	理解
今回	※前回	得点	得点	得点
2		220	109	111
	4	177	99	78
4		170	77	93
	5	132	69	63
3		190	94	96
	5	151	91	60
2		223	109	114
	4	175	94	81
4		152	77	75
	5	138	84	54
3		221	104	117
	3	215	110	105
4		175	94	81
	5	170	83	87
3		209	107	102
	4	182	98	84
5		172	61	111
	5	135	78	57
4		206	89	117
	4	183	93	90
5		136	67	69
	5	123	66	57
5		175	70	105
	5	104	50	54
4		168	87	81
	5	124	67	57
3		206	95	111
	5	143	56	87
5		107	71	36
	5	104	59	45
2		243	117	126
	4	199	103	96
5		118	64	54
	5	130	73	57
5		125	65	60
	5	140	68	72
3		194	104	90
	4	184	100	84
4		207	84	123
	5	151	82	69
4		186	87	99
	4	174	87	87
2		242	113	129
	4	193	100	93

[表1]

級が4名、3級が5名、4級が7名、5級が6名となっており、1回目の獲得級内訳(3級が1名、4級が8名、5級が13名)と比較して、クラス全体のレベルが大きく向上したことがわかる。

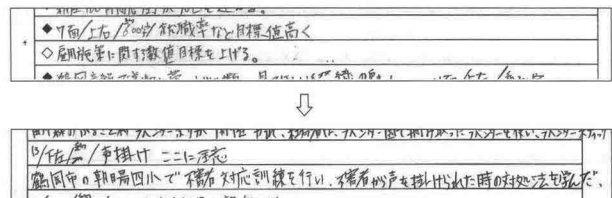
続いて総合得点を比較する。得点が上昇した学生は、全22名中20名と90%をこえた。とりわけ合計で30点以上の向上をみせた学生が11名おり、さらに50点以上と大幅に得点を上昇させた学生も3名いた。

以上、100日程度の短期間のうちに実施された2度の国語力検定テストの成果比較の点から、今回の実験的なNIE型演習の実施と学生たちの国語力の向上には、ある程度の相関性があったと考えてよいだろう。

(2) 作成された専用紙AおよびBの比較検証

次に、演習の成果として、学生が毎回作成した専用紙の比較を試みる。なお、演習の後半では、振り返り、チーム作業など様々な方法を試みているので、個々の評価を見極めにくいいため、NIEをはじめて体験した第3回(5月7日)と、その1ヶ月後の第7回(6月4日)の専用紙Aの比較を試みたい。

獲得級が当初の5級から3級へと2ランクアップした学生の場合[図表9]、第3回では「就職率など目標値高く」という見出しの記事内容を「雇用政策に関する数値目標を上げる」というように、具体的に文章をまとめることができていない状態であったが、第7回では、「声掛け ここに注意」という見出し記事を「鶴岡市の朝陽四小で不審者対応訓練を行い、不審者から声を掛けられた時の対処法を学んだ」と、1行で整然と内容をまとめられるようになっている。



[図表9] 記事内容を要約する力が向上している

同じく、5級から3級へと2ランクアップした別の学生は[図表10]、記事の抜き出し数は多いものの、記事内容の

要約については、「山形-名古屋便廃止へ」という見出しの記事を「山形-名古屋便含む9路線廃止。町長、市長は存続要望確(原文ママ)」とまとめるなど、航空便の一部廃止という記事の実態が全く伝わらず、問題があったが、第7回になると、抽出する記事数は減ったものの、「繭作り253個 園児が一番」の見出し記事を「鶴岡の絹産業発展を目指す「鶴岡シルクタウンプロジェクト」の一環、カイコ飼育にとりくみ(ママ)市立西部幼稚園に認定証」と丁寧にまとめられるようになっており、成長がみられる。

◆ 山形-名古屋便廃止へ	1面 左上	370字
◇ 山形-名古屋便含む9路線廃止。町長、市長は存続要望確		
▲ おのまね(りや)レテ株	207頁	1面 中右

↓

18面 / 左中央 / 346字 / 繭作り 253 個 園児が一番		
鶴岡の絹産業発展を目指す「鶴岡シルクタウンプロジェクト」の一環、カイコ飼育にとりくみ(ママ)市立西部幼稚園に認定証		
19面 / 上中央 / 416字 / 美術教育関係者の此忠		

[図表10] 記事内容を丁寧にまとめるようになっている

第3回と第7回の間、都合4回の演習を実施したことになる。上述のような専用紙Aにおける記事の抽出および要約の上達に加えて、専用紙Bのまとめ方の工夫や、授業後半の発表の態度などに関しても、短期間のうちに大きな成果があがったことが確認できた。

今後の課題 一まとめにかえて一

本稿では、基礎的な国語力の低下がみられる近年の本学学生を対象に、国語力向上を目指したNIE導入型の実験的な演習科目を実践した事実をふまえ、演習内容およびその成果を具体的に提示することで、今後の大学における初年次教育、とりわけメディア教育の構成・組立への参考となることを目指した。

本来であれば、演習が進捗していく中で、学生個々の国語力レベルをよりこまめにチェックし、個別に対応していくことが理想であったのだろうが、はじめての試みも多く、個別対応への時間確保が難しかった。

演習の進行に関しては、新聞から情報を読み取り、まとめ、創意工夫をこらして発表用の資料を作成し、壇上で発

表する、という基本的な流れを、学生たちが理解し、160分という時間の中でペース配分をしながら実行していくことが可能なレベルに到達するまでに、全体回数の半分以上を費やしたことは、想定外であった。

また、第3章で提示した成果については、参加学生が23名と少人数であったことや、2時限連続の教養ゼミナールを活用し前期期間に集中して通算28時限分の時間が確保できたこと、さらにはSA(Student Assistant)による教員への補助体制がうまく稼働したことなど、結果として有利な条件が整っていた影響も大きいと考えられる。なお、国語力検定テストの成果に関しては、獲得級もアップせず、総合得点の上昇もみられなかった学生が2名おり、このような学生への対応についても、改めて考える必要があるだろう。

さらに、参加学生のモチベーションを保つために、美術大学であることを活かして、個々のデザイン力や企画力を発揮できる専用紙Bを設計したが、むしろ安直に専用紙Bを作成することに熱中するあまり、肝心の専用紙Aの作成作業をおろそかにしてしまう学生もあらわれた点は、反省材料である。

本学では、次年度にむけて、ここで紹介したNIE型演習を発展させた「基礎国語」科目を複数クラス設置する予定である。今後は、本演習での試みなどを基礎としながら、新たに入学する新入生の国語力のさらなる向上を目指して、より効果的な演習方法を開発していく必要があるだろう。

註

- 1930年代、アメリカの「ニューヨーク・タイムズ」の取り組みが最初とされているが、全米的な運動として発展するきっかけとなったのは、1995年アイオワ州で実施された、「中学生の文字との接触調査」であった。その結果「中学生の約4割が教室外では全く文字を読んでいない」ことがわかった。そこで、青少年の活字離れの対策として、地元紙「デモイン・レジスター」と米国教育協会とが共同でNIE(Newspaper in Classroom 教室に新聞を)の活動を展開し、やがてNIE運動普及へとつながった。
- 日本の学校教育におけるNIE導入の歴史的経緯については、柳澤伸司「NIEの歴史的諸課題—さらなる新聞教育の研究にむけて—」(『日本NIE学会誌』7号、2012年)、など。
- NIE推進協議会は、全国47都道府県に設置された地元の新聞社(支局・総局を含む)、教育行政、学校現場の各代表によって構成されるNIEの拠点である。なお、1990年代までの日本のNIE導入および活用の経緯については、冨塚秀樹「NIE(教育に新聞を)の課題と展望—特に公民科教育に視点を置いて—」

(『京都精華大学紀要』第二十二号、2002年)などを参考とした。

4. 平成19年11月7日「教育課程部会におけるこれまでの審議のまとめ」(中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会)
5. 「学校教育法施行規則の一部を改正する省令の制定並びに幼稚園教育要領の全部を改正する告示、小学校学習指導要領の全部を改正する告示及び中学校学習指導要領の全部を改正する告示等の公示について」(平成20年3月28日通知)の中に、例えば、「(4)小・中学校における主な改善事項」として、「①言語活動の充実」「言語は、知的活動やコミュニケーション、感性・情緒の基盤である。このため、国語科における読み書きなどの基本的な力の定着を図るとともに、各教科等における記録、説明、論述、討論といった学習活動を充実したこと。」などの記載がある。
6. 平成23年4月28日 文部科学省告示第八十号
「教科用図書検定規則(平成元年文部省令第二十号)第十九条第一項の規定に基づき、中学校(中等教育学校の前期課程を含む。)及び高等学校(中等教育学校の後期課程を含む。)において使用される教科用図書として検定を経た図書の名称等を次のとおり告示する。」
7. 前述の「新学習指導要領」では、例えば「第3章 言語活動を充実させる指導と事例」の「(1)生徒の発達の段階等に応じた指導の充実」において、高等学校における教育に関して「グループで協同的に問題を解決するため、学習の見通しを立てたり、調査や観察等の結果を分析し解釈したりする話し合いを行う。」「新聞、読み物、統計その他の資料を基に、根拠に基づいて考えをまとめ報告書を作成する。」など、新聞を学校教育で活用していく点が強調されている。
8. 山形大学では、2009年7月9日、日本経済新聞社の菅井正迅氏を講師に招き、就職支援講座「新聞からの情報収集」を開催している(山形大学ホームページ「就職情報」URL http://www.yamagata-u.ac.jp/jpn/ym/modules/topics0/article.php?storyid=451&cyu_m=4_2)
9. 株式会社z会による国語力検定テストは、「読む力」「書くための力」「聞く力」「話すための力」「総合的国語力」の5つの力に分けて国語の能力を客観的に測ることを目的に、2007年にスタートした。「知識」分野テスト(50分)と「理解」分野テスト(50分)、に分かれており、いずれもマークシート方式で実施される。
10. 平成17年12月 文部科学省「読解力向上に関する指導資料—PISA調査(読解力)の結果分析と改善の方向—」

[執筆者]

吉田 正高

Masataka YOSHIDA

教養教育センター

Center for Liberal Arts

准教授

Associate Professor